

新書にみる民主主義への思い

財政金融委員会 専門員

おおしま けんいち
大嶋 健一

近頃の新書の出版状況は以前と大きく変わっている。かつての岩波新書や中公新書では斯界の権威がその分野をわかりやすく説いたものが多かったが、今では多くの出版社から「〇〇するなら〇〇するな」式のビジネス書や活字離れした人々向けの軽いものまで様々に出されている。何より新書の特徴はその潔さにある。限られた紙幅の中で専門書ならば何冊分ものことを語るわけであるから、誤解を恐れず熱く簡潔に言い切るところに魅力がある。「民主主義」を語る新書も昔から数多く出版されているが、当初の啓蒙型から次第にその時代の雰囲気や内容を反映した内容のものに移り変わる。一般向けなのだからそうしないと売れないのだろう。何冊かの新書でこうした流れを駆け足でたどってみたい。

まず、南原繁『人間と政治』(1953)、丸山真男『日本の思想』(1961)、福田歓一『近代民主主義とその展望』(1977 いずれも岩波新書)は、戦後政治学を確立した権威ある政治学者を書き手とし、戦時期の経験から民主主義は政治を構成する最も基本的な原理であり、大切に継承すべき崇高なものであるとする。この流れは今でも高校の政治経済の教科書に引き継がれている。

そして、時は経ち、東西の冷戦が崩れ、フランシス・フクヤマの著作『歴史の終わり』が話題となって以降、佐々木毅『政治はどこへ向かうのか』(1992 中公新書)や藤原保信『自由主義の再検討』(1993 岩波新書)では、再度自由民主主義の立て直しが語られる一方、佐伯啓思『「市民とは誰か」戦後民主主義を問いなおす』(1997 PHP新書)は、市民という言葉に隠蔽された衆愚化を指摘し、長谷川三千子『民主主義とは何なのか』(2001 文春新書)は、冒頭から勢いよく「いかがわしい言葉 デモクラシー」と始まり、ギリシャ以来そもそも墮落した政体であったことを暴き出す。

そこからまた時は流れ、最近では、79歳の老大家篠原一が、『市民の政治学』(2004 岩波新書)において、議論を闘わせながら意見が変化する、その過程を大切にする討議デモクラシーの復権を説き、森政稔も『変貌する民主主義』(2008 ちくま新書)で、政治の領域を狭め分配を市場に委ねる新自由主義への批判と、「〇〇が悪い」という対立構図を作り出しそこを集中攻撃するポピュリズムの風潮を嘆く。これに対し、再び佐伯啓思はそのものずばり『自由と民主主義をもうやめる』(2008 幻冬舎新書)で、表層的に立派なことや情緒的なことがまかり通る民主主義を金科玉条のものとして祭り上げることはもうやめようと言う。また、岡本薫『世間さまが許さない! 「日本のモラリズム」対「自由と民主主義」』(2009 ちくま新書)は、個性化・多様化を苦手とする日本人は「みんなと同じ」でどこが悪い、「世間さまのモラル」をルールにする論理が合っているとする。

人間社会が作り出した理想や原理を説く重要性は今も変わらない。しかし、その原理と現実社会との乖離を読者が感じるとき、そこにまた新たな新書の需要が生まれることとなる。杉田敦『デモクラシーの論じ方 論争の政治』(2001 ちくま新書)は民主主義を語り、議論することそれ自体が大切とする。決してこの分野の新書の出版が廃れることはない。